



埋木をして修復中の梁

た材料には不要となつた釘穴があったり、新旧で大きさや表面の感じが違っていたりした



埋木をして修復中の火頭窓

本證寺鼓樓はこれまでに一度、全解体されていることも分かりました。以前の全解体は棟札が残っている安政4年で、今回の工事と同じように材料を一本ずつ取り外して、建造当初からの材料で可能なものは再使用していました。このことは、再使用した材料には

文化財に指定された建物は、一般の建物と異なり、構造などに支障がない限り材料はできるだけ再使用します。腐ったり壊れたりした箇所だけを新しく補うのです。今回も折れたり腐ったりした部材は取り替えましたが、被害の小さい所は埋木などをしていきます。また、瓦でも使えるものは再使用しています。

木が語る建物の過去
—文化財保存修理—

すなわち、宝永7年と墨書きされた部材である化粧棟木は、一部が外側に出してしまっていたり、材質が桐材であったりするなど他に使用されているものと異なることから鼓樓ではない建物に使用されたものを転用した可能性があり、一方、宝暦10年の部材は、解体しなくては書けない場所から発見されているため、建造年である可能性が高いようです。



波打つ屋根

傾く鼓樓 —修理前の状況—
本證寺の鼓樓は、江戸時代中期に創建されたとみられます。幕末に修理され、三河地震で1階部分が倒壊しましたが、その後復旧され現在に至っています。修理前は、時代を経て古びた感じがむしろ往時を偲ばせ、趣のある景観を作り出していました。しかし、真正面東側から見ると2階は南に傾き、屋根は波打ち、軒先の瓦も何か所か落ちるなど、大きな地震や台風がくると倒れてしまいそうな状況であったため、解体修理を行うことになりました。事実、修理前の現況調査では1階の梁が激しく腐り、松材の使用が多かったため虫害が随所に見られるなど、保存修理は急を要すことが分かりました。

2つの創建年代

—続々と発見される年号—

鼓樓の創建年代が江戸時代中期であること以外は、具体的な年代を示す資料はこれまでありませんでした。しかし、解体を進めていく中で、様々な部材などに年代が墨書きされたものが続々と発見されました。まず、2階にある化粧棟木(※2)に「宝永7年(1710年)」の墨書き、鯨瓦に「宝暦10年(1760年)」のヘラ書き、2階の地垂木・肘木など(※3)にそれぞれ「宝暦

10年」の墨書きが見つかりました。このほか、修理前から存在が確認されていた「安政4年(1857年)」の棟札2枚も、書か



宝永7年の墨書きのある棟木

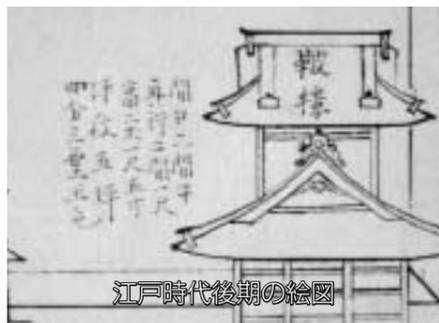
これらの発見から鼓樓の創建年代は、宝永



宝暦10年の墨書きのある肘木

宝暦10年のヘラ書きのある鯨瓦

7年か宝暦10年のどちらかであることが分かりました。この2つの差はちょうど50年。これは何を意味するのでしょうか。関係者はみな頭を悩ませました。宝永7年の翌年は親鸞聖人の450回忌にあたり、宝暦10年の翌年は500回忌にあたるため、どちらの年もそれにあわせて伽藍(※3)整備を行った可能性が十分にありえます。そこであらためて墨書きされた部材に着目しました。

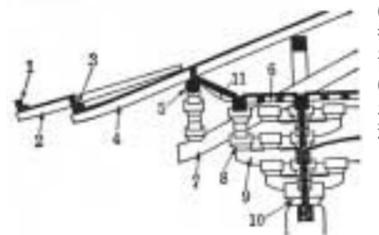


江戸時代後期の絵図

ため判明しました。当初の材料が使われていた箇所は2階だけで、1階はすべて前回の解体時か後に行われた修理時の材料でした。1階に当初材が使われていないのは、1階の規模を大きくしたため、それらが使用できなくなりすべてを新しくしたからだと推測されます。そのことは、本證寺に残る安政年間より前に描かれたと考えられる江戸時代後期の絵図から導き出されました。絵図に描かれた鼓樓にはその規模も書かれており、間口2間半(約4.5m)・奥行2間1尺(約3.9m)となつていますが、現在の規模は間口3間約5.4m・奥行2間半(約4.5m)で、ひと回り大きくなっています。では、なぜ1階を拡張しなければならなかったのでしょうか。それは安政4年に解体修理が行われたことと関係しているようです。安政4年の3年前、すなわち安政元年11月4日の安政東海地震と翌5日の安政南海地震によって、建物が被害を受けたことが考えられます。地震による被害の程度は不明ですが、地震以外にも長い年月による何らかの傷みがあったと推測されています。

※2 棟木・垂木・肘木・茅負 和建建築構造の各部の名称。

代表的な和様建築軸組みの細部の例 (唐招提寺金堂)



- | | |
|---------|--------|
| 1 茅負 | 7 尾垂木 |
| 2 ひえん垂木 | 8 ます肘木 |
| 3 木負 | 9 大斗 |
| 4 地垂木 | 10 軒支輪 |
| 5 がんぎよう | |
| 6 軒天井 | |

※3 伽藍 金堂、塔、講堂、あるいはこれらの堂塔を囲む回廊など、寺院を構成する形のことです。その配置を伽藍配置と呼びます。

■ 工事の様子



② 11月7日 2階の壁を撤去。四隅の柱は檜材、ほかは松材です。



③ 11月9日 1階の解体。安政年間の部材の中央の太い梁は、傷みがひどいため交換しました。



④ 12月4日 基礎の石垣の修復。屋根や建物の重みですれていった部分を直しました。



⑤ 12月28日 2階の組み上げ。左上の新しい部材が化粧棟木でこの部分に宝永7年の墨書きがありました。

甦る鼓楼 — 復原年代は… —

本證寺の建物群は、昭和19年(1945年)12月7日に発生した昭和東南海地震により、倒壊までには至りませんでした。被害を受けたといわれています。しかし、年が明けた1月13日に発生した三河地震によって倒壊した建物もありました。鼓楼は2度の大きな揺れにより、2階部分が傾いたと伝わり、1階も何らかの被害があったと思われま

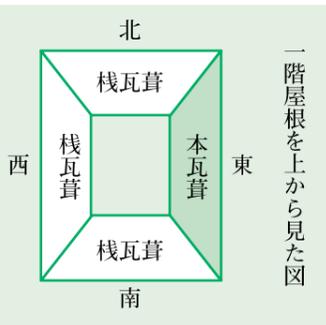
す。そこで昭和の修理が、昭和20年代には行われたようです。修理した部分の木材は、他の材料との違いにより判別できました。修理は主に1階部分で、2階の柱や屋根には確認されませんでした。

こうした修理経過を踏まえて、今回、鼓楼をいつの姿に復原するか協議しました。創建時に近い姿は絵図にあるように2階部



修理中の土壁

分が現在よりひと回り小さかったようすが、当初材が残っていないため絵図にあるように本堂に1階が拡張されたかどうか確認できませんでした。そこで、現在のようにな姿になったと考えられる安政4年の解体修理後の姿に復原することにしました。



しかし、復原する年代が決まってから、また一つ問題が出てきました。それは鼓楼の屋根瓦で、2階は本瓦葺(※4)なのに、1階は東面のみが本瓦葺で、他の3面は棧瓦葺(※5)であったことです。2階より1階のほうが新しくなっていたことは今まで述べてきたとおりで、本瓦葺を棧瓦葺に変えた可能性は高く、戦前は本瓦葺であったという地元の話もありましたが、その証拠がありませんでした。そんな時一枚の古写真が解決の決め手になりました。明治に写されたと思われる1枚の写真に、鼓楼の東と南面の屋根が本瓦葺で葺かれていたのです。この結果、修理前と後で一番大きく変わった所は、1階の瓦をすべて棧瓦から本瓦にしたことです。そして、本瓦に変更する事で屋根が重くなるため、1階の垂木をこれまでの3倍に増やし垂木の先端に乗る茅負(※2)を加えました。

※4 本瓦葺 瓦の葺き方のことで、本瓦ともいいます。平らな平瓦と、断面が半円の丸瓦を交互に並べます。寺社の屋根や武家屋敷など古い建物に使われています。

本證寺を見守る人々①

本證寺のお隣、鈴木フサ子さん

修理前の鼓楼も風情があつてよかったですよ。でも、少し傾いていて頼りなげな感じもしました。修理後はガツツリとして堂々となりました。



もともと歴史あるものが好きでした。その建物を作った時代の人々はどんなことを考えていたのか。その思いを偲ぶだけでなく、現在生きている自分は何をしているのだろうか…と考えさせられるからです。「どう生きるか」が私の人生のテーマです。そこからまた、未来のことを考えます。

今回の鼓楼の修理も、ただ建物を復原しただけではないですよ。鼓楼を見に来た人たちにも、過去に生きた人から学び、後世に継ぐものを感じて欲しいと思います。

本證寺を見守る人々②

現場監督 野口英一朗さん

今回の鼓楼の修理には大工・左官・瓦職人と異なる職種の人がかかわっています。さらに、高校卒業して間もない18歳から70代のベテランまでいます。何人もの協力があつて一つの建物が出来上がるということ、私たちが作り手は知っています。また、歴史ある建物の復原には気も遣います。本證寺は敷地も広大で、堀もあつて、その中に建つ鼓楼ですから、全体を見ながらの作業でした。



本證寺を見守る人々③

大工棟梁 入江逸雄さん

今の若い人は、私たちが学んできたことより、もっと高度なことを学校で教わってきています。でも、現場でしか学べないこともたくさんあります。例えば、尺竿ひとつとってみても…。ものさしを木にあてながら鉛筆で印をつけていきます。すると木が長ければ長いほど、わずかずつですが、誤差が生じます。その誤差まで計算に入れて最後は裁断するんですよ。パソコンを使った設計図ではなかったでしょうね。やり方が違います。そんな「わざ」も先輩たちから教わって覚えてきました。これからは後輩たちに覚えていって欲しいと思っています。



おわりに

本證寺鼓楼は、今回の保存修理によって今後20年程度は大きな修理を必要としないでしょう。本堂のような大きな建造物の場合は、大きな修理をすれば30年程度はもつといわれています。その間には屋根替えなど小規模な修理は必要でしょうが、木造建築はメンテナンス次第では何百、何千年ともつことは、奈良の法隆寺などの建物によって明らかです。昔は木造建築物を維持するために、300年という周期で伐採、植林を繰り返すことで生態系も維持されてきました。これがわが国の木造建築文化を守ってきたともいえます。

したがって、木は脆弱な材質にもかかわらず、その管理さえ間違わなければ半永久的に手に入れることができる再生可能な材質であるといえます。西洋の石造建築に使われる石材は有限な資源であることを見れば、我が国の木造建築文化は優れているともいえるでしょう。

本證寺鼓楼おひろめ会

今回の解体修理を終えて、きれいになった鼓楼をぜひ見に来てください。一番の見所は東の屋根です。修理前との違いが分かるでしょうか。(6・7ページの写真と見比べてみてください) さあ、広報片手にレッツゴー! ●とき 4月29日(祝)午後2時 ●ところ 本證寺(野寺町) ●問い合わせ 文化財課(埋蔵文化財センター)内 ☎(7)4490)

